

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2015年5月7日放送

「第65回日本皮膚科学会中部支部学術大会①

大会を終えて」

関西医科大学 皮膚科
教授 岡本 祐之

はじめに

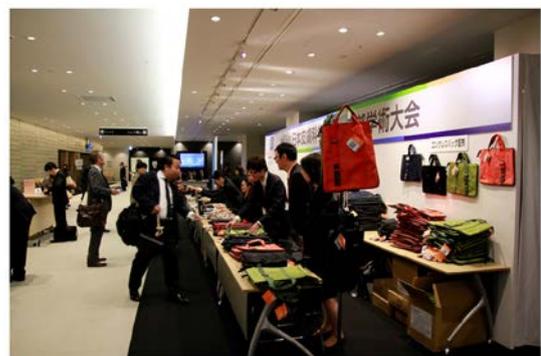
平成26年10月25日（土）と26日（日）に、大阪のコングレコンベンションセンターで、第65回日本皮膚科学会中部支部学術大会を開催いたしました。新しい魅力ある、グランフロント大阪を含む、ビル街の中にあり、大阪駅に直結する、アクセスのいい会場で行うことができました。大阪の新しい世界を感じ取れる環境で、ファッション・レストランなども、楽しめたかと思いますが、土日の人混みで、会場の場所が少し、分かりにくかったかもしれません。

当日は天候にも恵まれ、多数の先生方にご参加いただきました。盛会のうちに終えることができ、安堵しております。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

現在、皮膚科を取り巻く環境は、しだいに変貌してきています。今回の大会では、それに対応した、診療力のアップにつながる内容と、楽しさを、提供することを主眼といたしました。



グランフロント大阪



受付前

また、大阪での開催ということで、キャッチコピーを、「せやねん、やっぱり皮膚科学」、とし、「やっぱり皮膚科は面白い！」という思いで、楽しんでいただける学会を目指しました。

招請講演

招請講演1は、世界サルコイドーシス学会会長で、シンシナティ大学 内科学教授、Robert P. Baughman 先生に、「サルコイドーシスの皮膚病変」をご講演いただきました。私がライフワークにしています、サルコイドーシスの、皮膚病変の重要性、治療について、詳細にお話しされましたが、ご自身が専門としている疾患とはいえ、内科医が皮膚病変を十分に理解されていることに感銘を受けました。

標準治療のステロイド外用治療は、あまり効果がないと、日頃より認識しておりましたので、皮膚病変にやや特化した感のある、抗菌薬の効果、免疫抑制剤や生物学的製剤による、新しい治療法にも触れられ、大変有意義な講演でありました。

招請講演2は、東京大学 新領域 創成科学研究科教授、藤原晴彦先生に、「擬態の不思議な世界」について、ご講演いただきました。

ヒトの皮膚は、生体を守るためにいろいろな働きをしていますが、昆虫も、外界から身を守るために、擬態をはじめ、多くの工夫をしています。遺伝子による、体表の色や、紋様の変化に対する制御機構を解説され、また、昆虫の様々な擬態の様子を、実際の写真で見ることができ、視覚的にも楽しい講演でした。からだを守る皮膚の重要性を、昆虫を通じて再認識することができました。

特別講演

特別講演1は、私どもの大学の、薬理学講座の中邨智之先生に、弾性線維の新しい知見を解説していただきました。弾性線維は、組織の伸縮性を担う重要な役割を果たす細胞外マトリックスですが、その構築や、老化・紫外線による傷害機構など、詳細についてはまだ明らかでないところがあります。fibulin-5 と、LTBP-4 の、重要性について詳しく解説していただき、再生医療への道についてもお話しされました。

特別講演2は、私と同じ高校出身で、札幌医科大学 生体情報形態学の辰巳治之先生に、インターネットの次代について、講演していただきました。

インターネットを医療の現場と地域に広げ、必要な情報を、いつでも、どこでも医療に活用させることが重要である。そしてその情報が、薬、「情報薬」として作用し、健康促進に結び付くことを、パワフルにお話しされました。

教育講演

教育講演はいずれの学会においても、重要な役割を果たしています。今回、9つの教育講演と7つの専門医試験対策の教育講演を企画いたしました。

教育講演は、できるだけ日常診療に、直結した内容の講演を考え、まず関西医科大学ゆか

りのお二人の重鎮、堀尾武名誉教授と、東禹彦先生に、「匠が教えるわざ」として、光線過敏症と爪疾患について、深い造詣に裏打ちされた講演をしていただきました。学会の早い時間帯にもかかわらず、多数の先生方が、参加されていました。

そして、よく経験するものの、患者に説明しにくい疾患や状態をまとめた、「それは病気ではないですよ的疾患」、診療で困った時の、ものの考え方のヒントとなる「外来診療で困るとき：一人ディベートの効用」、小児で重要な疾患群を扱っていただいた「奥が深い子供の色素異常の診断」と、「小児のウイルス性発疹症の診かた」、治療に困ることの多い症例をテーマとした「治療に困る手掌の多汗症の治療」や、「足の皮膚疾患と患者指導」、「皮膚が痛い。患者のからだところ」、に関する教育講演も、実症例に基づいた素晴らしい講演で、多くの先生方が参加され、熱心に拝聴していただきました。

近年、皮膚科専門医試験は難易度が高くなっています。私自身が専門医試験委員を務めていることもあり、「専門医試験にでる〇〇」と題して、若い先生方には弱点の領域の、「アレルギー・光線検査」、「皮膚の生理機能」、「病理組織」、「免疫の基本」、「遺伝性疾患」、「ダーモスコピー」、「電子顕微鏡」に関する教育講演を行いました。

講師の先生方には、過去の専門医試験問題を検討しなければならず、準備に時間がかかり、ご苦労も多かったかと思います。専門医に必須の、各分野の知識を、みごとにまとめて講演していただき、今後、受験される先生方はもちろん、専門医の先生方も、知識の整理に役立っていただけたのではないのでしょうか。

シンポジウム

シンポジウムは3つ。サルコイドーシスに関連して、肉芽腫構成細胞の単球系細胞のシンポジウムと、全身性疾患についてのシンポジウム、そして私が興味を持っております、食物アレルギーについてのシンポジウムでした。

単球系細胞は、近年、肉芽腫だけでなく、皮膚疾患との関わりも、大きいことが解明されています。シンポジウム「目を向けてほしい単球系細胞の皮膚疾患への関わり」では、CD14とCD16で分けられた単球、Langerhans細胞、真皮樹状細胞、M1/M2マクロファージ、類上皮細胞について、その基本的事項と、皮膚病変への関わりについて詳しく解説していただきました。今後、各疾患の病態の解明と、各細胞の詳細な機能解析が、さらに進めば、単球系細胞が、診断や病勢の把握の、重要な手がかりになってくるものと期待しています。

次に、サルコイドーシスに加えて、皮膚科医が診療する全身性疾患のエリテマトーデス、皮膚筋炎、全身性強皮症、ベーチェット病について、「全身性疾患の現状と将来目指すもの」と題したシンポジウムを行いました。各疾患の皮膚病変を理解することの重要性と、全身症状について学ぶことができました。皮膚科だけで、重症例の診療を行うのは、なかなか難しい面もありますが、皮膚科医独自の切り口で、診療を行うのは、重要であると認識いたしました。

もう一つのシンポジウムは、「やる気でここまでわかる食物アレルギー」です。皮膚科医と患者さんとがやる気を出して、初めて原因が解明される、食物アレルギー診療の、真髓を学ぶことができたとと思います。口腔アレルギー症候群、食品添加物や納豆、牛肉、魚介類によるアレルギーについて、日常診療に直結する内容で、ストーリー性のある、原因物質解明の、興味深い講演に魅了されました。

一般演題は 122 題、ポスターは 72 題、CPC7 題と、多くの演題のご応募がありました。ご発表と熱心な討論により、本会を活発な会に盛り上げていただきました先生方に、感謝申し上げます。



おわりに

懇親会にも、たくさんの先生方が参加され、うれしく思っております。大阪での開催ということで、吉本の芸人さんによる和みの場を設けましたが、皆様には、大阪の味を楽しんでいただけたのではないのでしょうか。

余談ですが、関西地区の方と、それ以外の地域の方とで、芸人さんの知名度が大きく異なることをはじめて知りました。「ご当地の常識は常識ではない」ことをネタにしたテレビ番組がありますが、なるほどと納得いたしました。

最後に、抄録集発送の不手際など、関係の先生方には、数多くのご迷惑とご心配をおかけして、申し訳なく思っております。寛大なお心で、会を盛り上げ、楽しく、そして意義深い会にいただきました、会員ならびに関係の先生方、セミナーや展示などで、ご協力いただきました方々に、厚く御礼を申し上げます。